

「あ。」
と、ゴンタはあくびをして、ぼんやりようやく目をさました。

「あれ？」

きよるきよるあたりを見まわした。

あたりは緑の海だった。

（へへえ……？）

あぐらをかいてうで組みをして、ゴンタはぶかんと海の中うみにうかんで考えた。けど、考えてもわからない。海の中うみにいるのだからしょうがない。

（ほんじゃ、たんけんでもしてみるか。）

ふうわりふうわり、宇宙遊泳うちゅうゆうえいみたいにあるきでした。

しばらくいたら、赤あかや黄き色いろやだいたい色のコンブはやしの林はやしがあった。しまになった光ひかりの中でゆらゆら林はやしぜんたいがゆれている。

（なんかうまいものがありそうだなあ。）

ふわふわあと、ゴンタが林はやしの中なかにはいりかけたら、ピチーン、ピチーン、ピチーンと、すんだ音をたてて、青あおいメダカが三びき、あわてたようにとんできた。

「やい、ニンゲン。」

「もたもたするな。」

「こっちへこい。」

三びきで、ゴンタのかみをひっぱって、赤あかいサンゴの岩いわ

あなの中なかにつれこんだ。

「ああ、よかったねえ。」

岩いわあなの中なかには、とうきのこぶたが待まちっていた。むねには赤あかいケシの花はなをつけている。こしにはデバぼうちようをさげている。

「よかった、よかった。おまえさん、もうすこしで食たべられちゃうとこだったんだぜ。」

こぶたは、自分じぶんでなんでもうなずいた。

（へんなこぶた。）

と、ゴンタは思おもった。

「ああ、おかげさんでねえ。」

と、こぶたがいった。ゴンタはとてもおどろいた。ゴンタの考かんがえていることがわかるらしい。

「肉にくまんじゅうを食たべさせてもらったんでねえ。ほれ、ごらんのとおり、あっしはもうすぐおとなです。」

そういえば、むくむくむくむく、大きおおくなってる。ダンブにつんだときの十じゅうばいはある。

「おかげで鼻はなもなりました。」

そういえば、かけてた鼻はなは、もとどおりになっている。

（でも、へんなの。）

と、ゴンタは思おもった。

「へんじゃござんせん。海うみは万物ばんぶつの母ははでござんす。」

と、こぶたがいった。